

# I

## 生活スタイルの確認

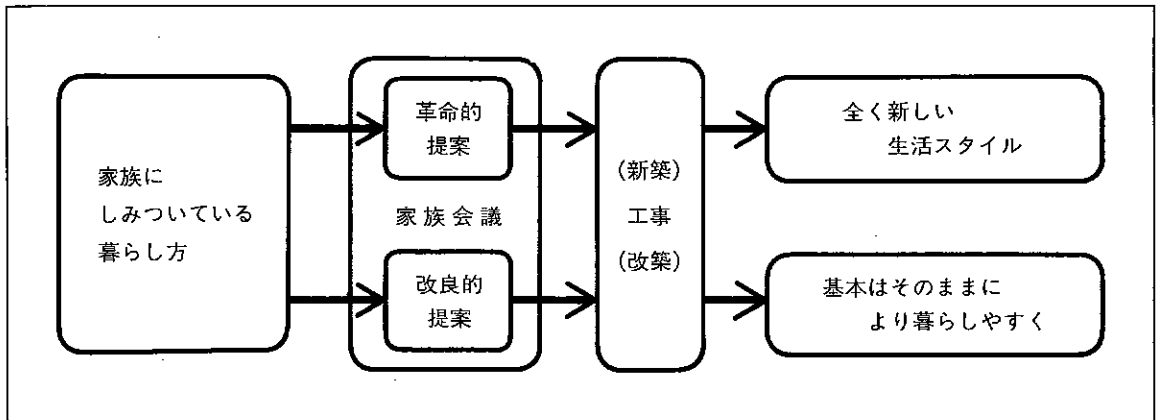
### 1 生活スタイル

住宅設計において設計者が最大の手掛りとするものは、設計を依頼された人または家族の生活スタイルです。

生活スタイルとは一人一人が集まって家族を構成しているときに、その家族の一員としての人間がどのように考え、どのように行動しているかと

いう問題です。

「生活スタイル」を言い換えるならば「家族の暮らし方の歴史」となるでしょう。なぜ歴史を考えるかといえば、その家族の長年の習慣など日常にしみついている暮らし方があるからです。



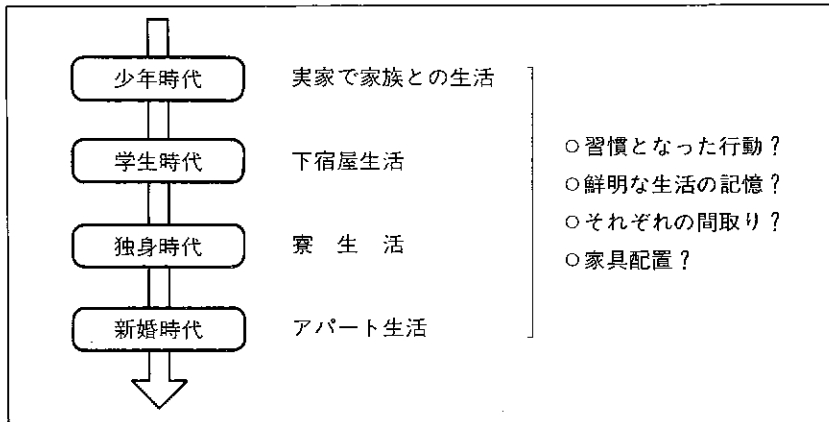
新しく造る住宅の基本方針の選択のしかたによっては、家庭そのものの成立基盤を揺るがしかねないのです。

視点を変えれば、住いの新築、あるいは増改築を考えることは、家族にとって生活の内容そのもの、大げさにいえば「家庭」とはという問題を基本に戻って話し合えるチャンスなのです。

子供の個室を増築する問題においても、完成後は自室にひきこもり、『まるで下宿人がいるよう

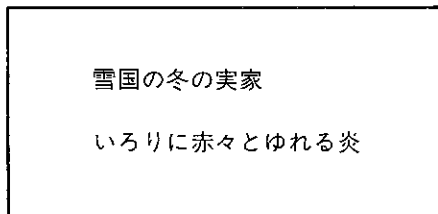
だ』という状況になってしまい、親子のコミュニケーションがなくなってしまったという例もよく耳にするのです。この一例からも、家に手を加えるということは家族にとって重大問題であることが理解できると思うのです。

## 2 どのように暮してきたか



人間は生まれてから現在までどのようなかたちにせよ家の中で生活してきました。自分の考えや判断による行動をとらなかった幼児期の生活様式が、無意識のうちに体に入り込んでいることも多いと思わなければなりません。

また、少年期などの体験として鮮明に記憶に残っていることで、新築の家には是非何らかのかたちで取り入れたいと思っていることもあるでしょう。



まず各自が生活したことのある住いを少しずつ思い起してみることで、そしてその家の中で自分がどのように暮していたかを考え直してみるのは、この作業はきっと楽しいにちがひありません。できれば記憶の中にある間取りを概念的にでもよいから描いてみるとよいでしょう。

同時にそれぞれの住いの中の細部の事として、あそこはこうなっていたので使いにくかった、ここはこうなっていたのでよく使っていたなどという記憶が蘇ってくるものと思います。

これらは貴重な体験であり、主観ですから、新たに設計される住いに対する重要なチェックポイントとなります。

- ① 祖母は台所の床のあげふたの中から、まるで魔法使いのようにありとあらゆるものを取り出していた。
- ② 祖父の書斎には山程の蔵書があったが、ある本が見たいと頼むと、すぐに取り出してきて、その整理のしかたと書斎の造りにはいつも感心していた。
- ③ 夏の土間のたたきはとても涼しく、夜はいつもそこで家族と話しをしていた。

### 3 現在どのように暮しているか

昔の記憶の中の住いの体験をひと通りメモ書きなどにまとめたならば、いよいよ今現在住んでいる家と、その家の中における家族の暮らし方を考えてみることにしましょう。

このことは直接的に新しい住いに反映される重

大な足掛りとなるものですからじっくりと検討することが必要です。

ここでは文字通りの生活スタイルを明確にすることに重点をおくことにします。

#### 3-1 例としての3DKの生活

本例は専有部分65m<sup>2</sup>程度の中層集合住宅です。家族構成は、夫婦に子供2人。長子は女で大学生(A子)、第二子は男で高校生(B男)という構成です。

A子、B男の使用する部屋は一応独立しており、いわゆる個室です。ただし引き戸に鍵はついていません。

夫婦は東向きの6帖を寝室としています。一般論からすると夫婦寝室が最もプライバシーの要求度が高いとされますが、この例では『子供の勉強のため』に犠牲になっています。この6帖は食堂とフスマ1枚で仕切られ、寝具が敷かれている以外の時間は開放され、食堂と一体となりいわゆる居間として使われています。日常の食事はすべて食堂で行なわれます。来客時には6帖間にお膳を出し、そこで食事をとることもします。フスマを

開放して合計12帖の広さはあっても置かれている家具は雑多で、落ちつきは得られません。時として病人があり6帖間で寝ている場合は、フスマが閉じられています。外気に面した窓のない部屋ですから、昼間でも電灯をつけての食事となり、高度の息苦しい空間は憂うつといわざるをえません。

全体として狭さに起因する欠点は多いのですが、65m<sup>2</sup>程度の3DK、あるいは3LDKは現在供給が行なわれている集合住宅では最も数が多く、ここで夫婦に子供2人の一 가족が生活していることも数の上ではいちばん多いと考えられるのです。

最大の長所は家族間コミュニケーションの円滑さです。誰がどこにいてもいつもその気配が感じられ、一声出せば、どこにいても聞えて、返事がくるのです。本来家族の中で守られるべきプライバシーは夫婦間の行為ぐらいで、特にとりたてて



考慮する問題はほかにはないことがわかります。極論すれば家族間では、何でもプライバシーであるとする一方で、プライバシーといえるものは何もないのです。そこから先は、現在の生活状況を認識し合った上で、構成員の一人一人の協力でより

よいコミュニケーションを育成していかなければなりません。

この例のように、現在の生活をじっくりと観察していただきたいのです。

### 3-2 家族構成・成長・変化

家族構成を考えることは住宅設計のスタートです。

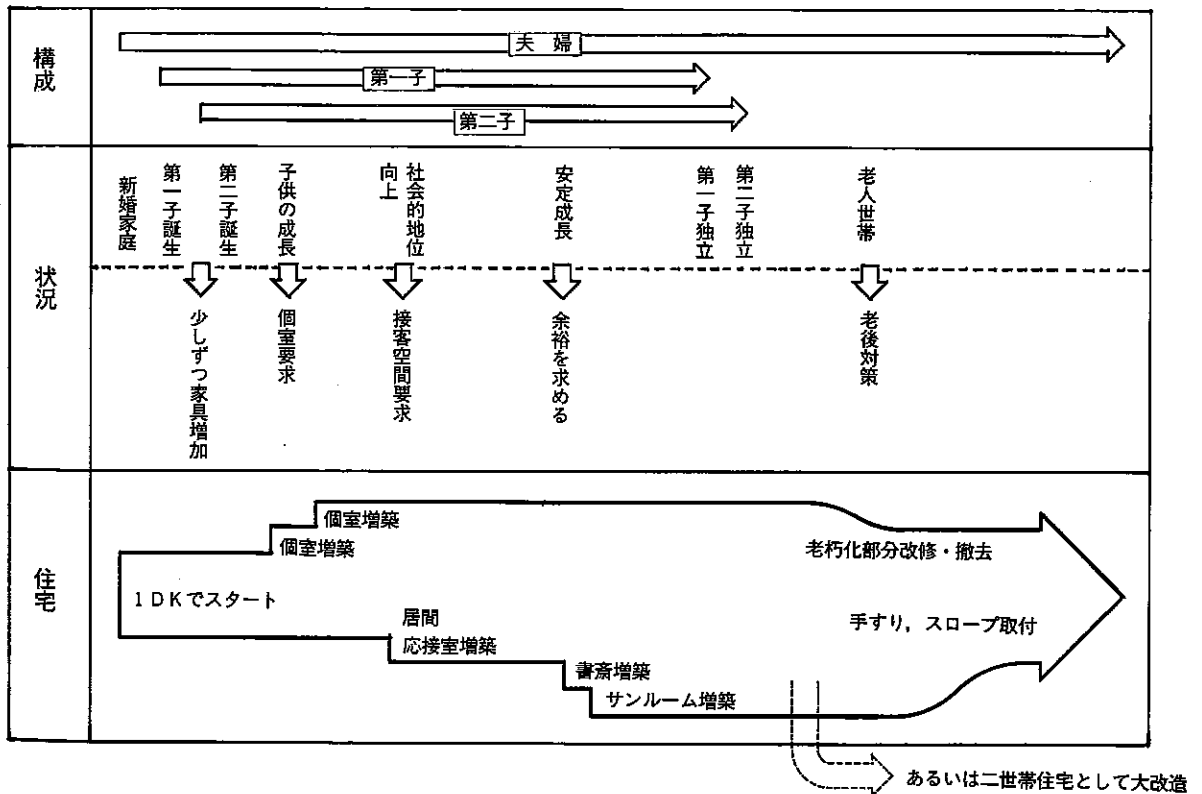
家族構成は成長・変化するものです。それに伴って住宅も成長・変化しなければなりません。最も簡単な家族構成の変化に合わせる方法は転居ですが、一般の日本人の習慣としては「不動産」に対する固定観念があり、それはなかなか困難なようです。

そこで住宅設計をする場合には将来の変化をど

こまで見込んでおくかが大きな問題となってきます。もっとも住宅程度のものであれば増築はどのようにでもできますし、在来の木造住宅であれば柱を抜いてしまい内部間仕切の大変更も可能です。しかしそれは大切な骨組を相当程度痛めることになるので、設計の当初から増改築予定位置を見込んでおくことが望まれます。

家族の成長変化について簡単に見てみましょう。

表は一般的な増・改築を繰り返す例を示しまし



た。ほかには当初から大きめのワンルームを用意しておき、間仕切家具の適当な移動・増設をすることにより、家族構成の成長・変化に家具で仕切るなどして対応していくという方法も、よく提案される一方法です。

現在は成長・変化のどの段階でしょうか。そして短期変化をどこまで見込んだ設計をするべきでしょうか？

### 3-3 生活時間・習慣

家族構成員が日常どのような生活活動をする習慣があるかは家族構成と共に設計上の重要なポイントであり、設計においては直接、間取りに影響します。

たとえば食事空間は畳敷きの茶の間で、ちゃぶ台でなければならないと習慣上考えている人もいます。このことは建築家の側からも否定することではありません。

「いつもこうしている」内容はそのまま建築家に伝えればよいのです。建築家は茶の間をふまえた

うえで、よりよい食事・だんらん空間を提案することになるでしょう。

家族構成員間の生活時間のずれは他の構成員に重大な影響を及ぼすことがあります。また一家族全体の生活時間のずれが隣り近所に影響を及ぼす場合もあり得ます。

このことを簡単な例をあげて説明してみましょう。前出の3DKの家族をモデルとします。

家 族		
父	： サラリーマン	45歳
母	： 公務員	43歳
A子	： 大学生	20歳
B男	： 高校生(受験生)	17歳

平 日 (朝)		
父	： 出勤	
母	： 出勤 (早めに起きて炊事・洗濯)	騒音
A子	： 学校	
B男	： 学校 (ぎりぎりまで寝ていたい)	

平 日 (夜)		平 日 (深夜)	
父	： くつろぐ	：	休 む 就寝に影響
母	： くつろぐ	：	休 む フスマ1枚
A子	： 勉強	：	休 む
B男	： 勉強	：	勉強→夜食など(台所を使用)

土曜日 (朝)					
父	:	休日	:	寝ていたい (昼寝用フトンを敷いたまま)	← 見ながら食事
母	:	出勤	:	いつもの通り炊事・洗濯	
A子	:	昼から学校	:	ゆっくりしていたい	
B男	:	学校	:	いつもの通り	

このような生活時間のずれはどこの家族にも見られることですが、考えようによっては深刻な問題になる可能性もあります。ただし生活時間帯や習慣というものは外的な条件でどんどん変化していくもので、設計にどこまで反映させるかの判断は家族会議を開いて決めるのがよいでしょう。

習慣としてこの家族は食後、6帖の和室でゴロゴロ横になってテレビを見たり、新聞を読んだり

します。また夏の風呂上りには、行儀のよいことではないのですが、全員が下着姿のままです。

これらのことは家を新築し、あるいは改築しても、変化するものとは考えられないので、その家族特有のリラックス方法であると認識して、建築家と共に計画を進めるようにしたいものです。

### 3-4 趣味あるいは特殊なこと

家族構成員のもつ趣味なども設計に大きな意味をもちます。

#### 趣味と空間

蔵書——書斎  
 ピアノ——防音室  
 手芸——ホビールーム  
 オーディオ——防音室  
 高級車——ガレージ

園芸——温室  
 茶道——茶室  
 D・I・Y——ホビールーム  
 書道——和室  
 日舞——和室

これらはすべて専有面積の必要な、それなりに資金を食う空間です。通常は、寝室や水まわり空間などどうしても必要な部分の面積を確保した残りの面積をそれぞれの空間に振り分けることを行なわねばならない場合が多くなります。よって、兼用でよいもの、どうしても独立室として必要なものを分け、計画を進めていくこととなります。

特殊なこととして、住宅に店舗や診療所が併設される場合もよくあることです。診療所などには

別視点の計画理論が必要であり、それによってもすれば診療所設計に気が奪われ、住宅は住めばいいということになりかねません。しかし、満足のいく診療を行うためには十分な休養が必要なことは当然です。住宅部分にも診療所部分の設計と同じ時間をかけてもかけ過ぎではないのです。しかし現実には併用住宅の住宅部分は、既成のマンションの3DK、4DKと同じようになってしまっている例がほとんどです。

## 4 行動を思い起して

住宅の中での行為を住宅以外の施設と対応させて考えてみましょう。表にあげたものは単一の行為だけであり、もちろん実際にはいろいろな要素

が複雑に絡み合っているものです。住宅の中での行為はむしろ文字で表記できないものの方が多いといえるでしょう。

### 行為と施設

娯楽——レクリエーションセンター  
入浴——公衆浴場・温泉  
睡眠——ホテル  
食事——レストラン  
接客——料亭  
学習——学校・図書館

排泄——公衆便所  
冠婚——式場  
葬祭——寺社、葬儀場  
育児——保育園  
休養——保養所  
療養——病院  
寄合——コミュニティセンター

単語として表現できる行為の中でも冠婚に代表されるように、もはや住宅ではほとんど行なわれなくなってしまった行為もあります。こうして書き並べてみると住宅はなくともよいかのように思

えてきます。しかし住宅の存在意義というところまで考えれば、その第一は家族とのコミュニケーションであり、家族の構成であるわけです。

### 図書館と学習

図書館での学習を考えてみる。閲覧室あるいは自習室という大きな部屋では、多数の人が各自で学習している。その中に入り、新たに自分のわずかな空間を確保して学習を始めるのである。大きな机は6人掛けで専有できるスペースは小さい。辞書、教科書、ノートを十分に広げることができない。椅子も高さ調整ができずに悪い姿勢を強いられる。歩いている人もいれば、ヒソヒソ声で相談している人もいる。その意味では学習環境は悪いし、落ち着かないはずである。しかしおおくの場合、勉強がはかどる。

自宅の個室では、誰からもじゃまされずに、まったく一人の空間を自由に造り勉強できるはずであるが、つい別のことに気が散ったりする。

図書館では周囲の人全員が学習しているのである。その雰囲気にはきずられ、いい結果が出るのではないだろうか。



## ホテルと睡眠

ホテルでの睡眠を考えてみる。ひとたび部屋に入ってしまうえば完全に自分だけの空間となる。防音・遮音性が高い。完全空調。照度も自由にコントロールできる。ベッドも外国の一流メーカーのものであり、固さも、枕の大きさも申し分ない。睡眠の条件はすべてそろっている。短期滞在ならばぐっすりと眠れることであろう。しかし長くなるにつれて落ちつかない状況が訪れる。何が欠けている？

おそらく家庭的な雰囲気といった精神的な条件ではないだろうか。

これらの施設から学ぶことは、住宅に取り入れて良くなる点、悪くなる点のその基本的考え方をはっきり選別することです。そっくりそのまま取り入れるのではなく、そのような施設空間で得られる基本的な参考となる点を家庭のスケールにおきかえて見るのが大切です。

たとえばレストランで豪華な食事をした経験から、住宅の食堂にもシャンデリアを、と考えるのは危険です。そこから学ぶことは、その場に合った照明の演出効果があるということであり、蛍光灯でない光が食物を引き立たせ、人の顔を健康的に明るくしていたということです。

行動のひとつひとつを思い起こすということは、本人特有のクセを含めて行動を明確にしておくことです。

右を下にして寝ることが多い人は、素晴らしい目覚めのために、窓がベッドの右手にあることがいいのかもしれませんが。机に向って書き物をしているときに辞書の入った書棚を常に左手に置くことにしている人がいるかもしれません。

これらのことは、たいしたことがらではない条件の部類に入るかもしれませんが。しかし一生に一度の自分の家を持つのです。自分の好みが隅々まで行きわたった家を造るために、このような些細ことを見逃したくはないものです。

## 5 新居に何を求めるか

新居に対する家族の要望を出しつつ、それらを積み上げたとするとおそらく大邸宅の様相を呈するかもしれません。初めはそれでよいのです。大いに夢をふくらませてください。そこから話し合いが始まるのです。

## チェック例

- ① 年に数度しか使いそうにない空間
- ② 兼用できる空間
- ③ 生活スタイルの急変をもたらすような空間
- ④ 雑誌から抜き出しただけのようない実現的で

ない空間  
などの要求が出されてはいないでしょうか。

設計に直接反映すること

現在の住いの長所・短所の明確化

現在の長所はそのまま長所として新居に組み入れ、現在の短所は新居に同じような所を造り出さないことです。当然のことですが、出来上ってみて、今まで何の不自由も感じずに使っていたものが、何となく使いにくいと感じるようになってしまったならば、それは長所の明確化を怠ってしまったのであり、再び同じような使い勝手の悪さを感じずるようであれば、短所の明確化を怠った結果なのです。

#### チェック例

- ① 台所吊戸棚：高過ぎて日常使えず、物を死蔵する場所となっていないか。
  - ② 押入れ：物を詰め込み過ぎて、何がどこにあるか不明になっていないか。
  - ③ 窓の高さ：机の高さと微妙に違い、相方が生きていないのではないか。
- これらのことは大きな欠点です。しかし一般に

場合によっては十分に話し合った上で新しい住い方を取り入れる場合もあります。世代交替の時期などには行ないやすいのですが、この場合には年長者にとって新天地で暮らす思いがするかもしれません。無言のうちにも精神的圧力を感じることもなりかねないので、設計段階から取り入れようとする新しい住い方をよく理解できるように、そして使いこなせるように、話し合いの場でよく納得してもらわねばなりません。和式便器から腰掛け式便器への移行はお年寄りには多少の抵抗感があるようですが、これなどは話し合う必要はほとんどなく、腰掛け式の快適さは一度経験してみればすぐにわかることであり、多くの例ですでに証明済みです。

#### 話し合う必要がある例

家族がいつも集まる空間—居間—から畳の姿をなくすことがあげられる。どうしても畳の好きな人がいる。椅子では長い時間を過せないのである。すると自室である和室に閉じ込められてしまうことになったりする。

あるお宅の例で、一家の洋行の経験から、新築した住いに畳の部分を一切設けないという条件での設計があった。出来映えは施主にも設計者にも十分に満足のものであった。数年して訪れてみると、じゅうたん敷きの一部にウスベリが敷いてあり、座布団が置いてある。御主人曰く、

「ときどき何となく畳の上の座布団に座ってみたい。」